九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

物語解釈と場所の意味 ： 人格発達と癒し

荒木, 正見
福岡女学院大学 ： 教授

https://hdl.handle.net/2324/1686465

出版情報：人文学研究 ： 福岡女学院大学人文学研究所紀要. 3, pp.1-48, 2000-03. 福岡女学院大学人文学研究所紀要編集委員会
バージョン：
権利関係：

物語解釈と場所の意味

―人格発達と癒し―

荒　木　正　見

福岡女学院大学　人文学研究所紀要
人文学研究　第３輯
2000年３月

物語解釈と場所の意味

―人格発達と癒し―

荒　木　正　見

序　「意識」「無意識」および「退行」「再統合」と「エネルギー」

小論は，場所の意味に着目して物語を解釈する試みの一端を為すものである。

とくに小論では，「意識」と「無意識」の対比が物語中の「場所」に象徴されていることに着目すれば，効果的な解釈が可能になるのではないか，という場所論的問題意識による物語解釈を試みる。

小論での解釈例としては，物語の元型を為すと思われる日本の昔話の解釈を試みることによって，主に，意識と無意識の対比が場所に象徴されていることを考察する。ここで，昔話をなにもかも選びとるのもひとつの方法かもしれないが，小論では，後述するように，意識的な場所から無意識的な場所に移動して，再び意識的な場所に帰ってくると，人格発達したり癒されたりすることを含む昔話に焦点を合わせて，そのようなテーマの昔話を例に挙げつつ考察を遂行する。すなわち小論は，以上の仮説をもとに，それが具体例の中で真に述べられ得るかを検証するものである。

その場合，「人格発達」のテーマは，おおむね子供が大人になる，という内容に着目すればよいわけで，比較的分かり易いが，「癒し」のテーマについては，次のように考えられる。すなわち，この場合には，なにかの病気や障害が前提とされて，物語が始まる。そのような病気や障害が，どのように癒されたと示されているのかを読み取ることになる。

小論では，「場所」をはじめとする幾つかの概念を用いて解釈を遂行する。「場所」をどのように理解するのか，や，どのような概念を用いて人格発達や癒しを読み取っていくのかについては，第二章で，例に即しつつ丁寧に考察

する。その際，特に「場所」が，哲学的に重要な意味を持つとともに，以下に述べる人格発達の諸概念と巧妙に絡んでいることをも確認する。また，考察から得られた実践的な結果として，各章の最後に，それらの例から得られた「人格発達」や「癒し」について現実的に生きる場面でのヒントに言及する。

このように小論では，場所の構造として特に，「意識」と「無意識」との大まかな構造的な対比を配慮することを述べていくが，一般的に「意識」とは自覚的な心の状態であり，「無意識」は，無自覚的な心の状態を意味する。従って，場所との対応も，そのような心の状態を喚起する場所を考えればよいことになる。日常自覚的に生きている場所とそうでない場所との対比例としては，陸と海，家の中と家の外，村や町などの暮らしている場所と山や荒野などの暮らしていない場所，なじんでいる場所と神秘的な場所などが考えられる。また，町や都会などのように意識的に発達している場所と故郷，田舎，村などのように意識的には発達していない場所との対比も考えられる。さらには，近代的な場所と旧時代的な場所なども挙げられる。

また，「無意識的な構成の変化」を小論では，「退行」と「再統合」という概念を用いて説明する。いずれの概念もさまざまな心理学者が指摘し，理論を展開しているが，筆者は筆者なりに次のように理解し，教育相談等に応用している。

「退行」は，意識と無意識の境界が曖昧になることである。意識つまり自覚的な領域が曖昧になれば，日ごろ意識的に抑え込んでいる本能的な衝動や，内面のアンバランスな状態が現れやすくなる。その場合には当然，混乱しており，幼児帰りと呼ばれる幼稚な行動も起こる。従って，エネルギーを浪費し，やや危険な状態でもある。もちろん，物語の中ではそのような行為として表現される。また，昔話の場合，海，池，湖，川や山，荒野や砂漠，というような曖昧な場所に行く場合，さらには，神秘的な場所に行く場合などは退行していると考えられる。

ところが一方で，このように意識と無意識をかき回すことで自分の問題を浮かび上がらせることができるし，そのあと，うまくまとめれば，退行しないでいるよりもずっと高いレベルの人格発達が得られることにもなる。

「再統合」というのは，このような退行後に得られる新たなまとまりを意味する。従って，それが高いレベルで行われれば，「人格発達」と同義になる。

その際，高いレベルで統合するために必要なのが，「エネルギー」である。物語の進行の行方に重要な役割を果たすエネルギーが，人格発達の重要なキーワードでもある。もっとも物語というものは，すべて原則的には，ストーリーの展開を通して退行を促し，かき回すことによって問題意識，すなわちテーマをあらわにし，それを円満な解決という高いレベルの再統合か，悲劇という低いレベルの再統合かに導くものだともいえる。

ところで，エネルギーには「量」の側面と「質」の側面とがあるといえる。昔話では量は食事，睡眠，体力，金銭，豊かな生活環境などによって表現される。また，質はエネルギーをうまく利用する合理的な統合性を意味する。従って，質の側面は多くの場合，知識や知恵が関係し，それらや他の諸条件によって，ホメオスタシスすなわち恒常性が得られた状態として表現される。当然，そのような知識や知恵を得ることが，物語の中で高く評価され，結婚や至福を得ることになる。

さて，以上の前提をもとにして各章では次のように述べていく。

第一章で述べるように，昔話は象徴的な意味合いの強い表現形態である。この章では，昔話の成立や定義に触れつつ，昔話特有の象徴性の意味から，昔話はなぜ，根底的な型として解釈することが可能なのかを簡潔に述べる。

第二章では，『聴耳』という昔話を対象にして，小論を貫く「場所」「意識」「無意識」「退行」「再統合」「エネルギー」などといった諸概念の相互の関係について考察する。その過程を通して，物語に含まれる「人格発達」や「癒し」の意味と，我々にとって必要な人格発達や癒しの方法を考えてみる。

第三章では，『瘤取り』という昔話を通して，心身のアンバランスを癒す仕方を考える。この場合も，場所は重要な意味を持つ。

第四章では，『手斧息子』という昔話をとりあげて，身体に現れた障害をむしろ武器にして逞しく人格発達し癒される仕方を考える。この場合にも，場所は重要な意味を持つ。

第五章では，『蹠長者』という昔話をとりあげて，超越的なものに委ねてエネルギーの質を整えることにより，人格発達し至福を得ることを述べる。こ

こでも場所は重要な意味を持つ。

第六章では，これまで述べてきた諸例をふまえて，物語解釈に「場所」がどのように関わり，また，小論で遺した問題はなにかについて，簡潔に纏める。

テキストとしては，関敬吾編『日本昔話大成』（角川書店）の各巻を用いる。

また，「癒し」というテーマや，伝承された昔話という性格上，今日の通念では差別に繋がる表現があることを前もってお詫びする。念のため，小論の立場を述べておくと，根本的にはそれぞれの立場にいる人が差別されたと感じる語は用いるべきではないとする。他方，資料として残されたものについては，学問の普遍性という点から，やむなくその表現を引用する。ただし，筆者自身の地の文では，差別的雰囲気が出来るだけ感じられない語で表現する。さらに，小論のテーマ「癒し」は，差別のような心の傷についても癒されなければならないという意味を含む。差別というのは，差別される側の心の傷が深いことはいうまでもないが，差別する側の心の病気でもある。この本に，それを解決する手掛かりの一端でも記せることを願う。

さらに，小論の性質上，シンボル事典や，象徴解釈について辞書的に用いる書籍を常備して使用したが，紙幅の関係上，それらをいちいち文中で断ることができなかった。それらの書籍の一部については論末に列記する。

第一章　昔話と「人格発達」や「癒し」

昔話にはなぜ，物語の元型としての根底的な型が表現されうるのか。この章では，まずそのことを確認し，「人格発達」や「癒し」の意味をどのように求めればよいのかについて述べる。

昔話はまず口承文学，すなわち口伝えに伝承された物語だという点で，普遍的な型すなわち元型的パターンを表現しやすい形式を持つものだといえる。

特に昔話については，一般的に柳田國男の定義に従うが，その定義を考慮すれば，いかに型を重視し，そのことで我々の生き方の根底的原則を保存しようとしているかが分かる。まず，その定義を述べておく。

柳田國男の『口承文芸史考』という著作には，「我々がハナシといっているもののうちで，『昔々ある処に』という類の文句をもって始まり，話の区切りごとに必ずトサ・ゲナ・ソウナ・トイウなどの語を附して，それが又聴きであることを示し，最後に一定の今は無意識に近い言葉をもって，話の終りを明らかにしたもの」（『柳田國男全集　8』ちくま文庫，1990，90頁）という定義が述べられている。

この定義からは，昔話が，伝聞であることに徹して，非現実的な性格を持っていることが強調されている。つまり，最初の「昔々ある処に」と，最後につけられる呪文性を持った物語の内容とは関係のない言葉，例えば「豆が煮えた」「どんどはらい」などのような言葉で挟まれたことで，非現実性を示し，さらに「又聴き」すなわち伝聞性を強調することでその非現実性を強化していると言える。

昔話のこの非現実性についてはさらに，柳田國男の，伝説と昔話との比較を参考にすると一層分かりやすくなる。柳田國男の定義によれば，伝説と昔話との相違は「（イ）一方（伝説）はこれを信ずる者があり，他方（昔話）には一人もないこと，（ロ）片方（伝説）は必ず一つの村里に定着しているに対して，こちら（昔話）はいかなる場合にも『昔々ある処に』であること，（ハ）次には昔話には型があり文句があって，それを変えると間違いであるに反して，伝説にはきまった様式がなく，告げたい人の都合で長くも短かくもなし得るということ」（『柳田國男全集 8』110頁）とされている。つまり，伝説は，たとえひとりであったとしても，それが現実にあったと信じる人がいるという前提のもとで成立しているが，これに対して昔話はまったくの非現実を前提としている。

では，このような非現実的な物語が我々の歴史の中で生き残り，生活や文化の中に残ってきているということは，いったいどのような理由と意味を持つものなのか。

第一には，生存の原理や生存の知恵が含まれているということである。時を超えて残ってきたということから，それはなんらかの意味で我々にとって必要なものだと考えられる。このようなものは現実的に直接必要なものに比べて必要な理由が曖昧ではあるが，やはり残ってきた以上，なにか必要な理

由があるはずだといえる。従って，それは現実的なものよりもっと普遍的な意味で必要なものではないかと考えられる。つまり，普段はそれほど必要だと感じてなくても，もしくはただ単に楽しいからという程度の理由だとしても，それが何百年も伝承されるということは，何か深いところで必要だと感じているのではないかということである。そして，そのようなものの存在理由は，もはや，最も抽象的で根底的な理由だと思われる。つまり，それは生存にとって必要だというしかないと思われる。従って，昔話には，生存の原理や生存の知恵が含まれていると考えられる。

第二には，昔話は形式上，生存の原理や知恵を読み取れるだけの奥行きがあるということである。地域が替わっても，また，時代が替わっても，特定の形式をかたくなに守るというのは，その形式でなければ伝えられないことがあるからだと推測できる。そして，そこで守られる形式によって表現されることの内容が，先に述べた生存に関して必要なこと，すなわち生存の原理や生存の知恵であるならば，昔話には，それを分析し，小論のようにやや深読みをして，生存の原理や生存の知恵を探し出すことができるだけの奥行きがあるといえる。

いま，以上のような前提のもとで昔話の中の「人格発達」や「癒し」を読み取ろうとする時，それらはどのような型として表現されるのであろうか。

「人格発達」に関しては，子供が大人になったり，小さいものが大きくなったりするが，物語分析の常識から言えば，人格発達の完成は，結婚で示されるのである。

また，「癒し」というのは，何らかの心身の傷や病気や障害，その他の不健康な状態が回復することをいう。

ということは，昔話の中に，人格発達の内容があったり，なにか上記のような不都合な状態が回復した内容があれば，そこに「人格発達」や「癒し」が存在することになる。そして，空間的時間的に型を変えないのだから，ひとつの物語の内容はすべて必然的な糸で結ばれているということになる。そこで，その回復に至る経緯の中に，必然的な回復に至る理由が忍ばせてあることになる。それこそが「人格発達」や「癒し」の条件である。これから，具体的な昔話の中の，このような点に着目して，「人格発達」や「癒し」を読

みとっていく。

第二章　『聴耳(ききみみ)』における「人格発達」と「癒し」

[『聴耳』の典型]

この章では『聴耳』という昔話において示される「人格発達」と「癒し」について考える。なお，この章では，特に考えていく際に必要な概念も確認するので，まずは「場所」について詳細に考察し，随時，序で述べた人格発達の諸概念の説明を挿入しながら述べていくが，当初は，物語に沿った解釈例を示す目的から，細かい定義には触れずに解釈に終始し，のちに，用いた概念の定義に従ってもう一度まとめて述べることにする。

『日本昔話大成　3』(昭和五三年) には，『聴耳』が三種の型に分類されている。そのうちのA (288—289頁) は，獣の言葉を教えてもらって金持ちになったという「聴耳」のモチーフのみが示されているだけであるが，B (290—304頁) とC (304—309頁) は，「聴耳」のモチーフに加えて，「癒し」のモチーフが示されている。そのうちCは，狐を助けたら狐が女房になりに来たという「狐女房」の話と複合している型なので，ここでは，まず，Bの典型として記されている物語の概略を紹介する。

『聴耳』B (鹿児島県大島郡奄美大島)

1　貧しい男の流れ者が，ある村の薬師堂で，薬師如来と出雲神との密談を聞く。
2　密談の内容は，この男と生まれたての赤ん坊を結婚の糸で結んできたというものであった。
3　男は赤ん坊と結ばれてはたまらないと，その夜生まれた赤ん坊を捜し当てて，首を一突きして去る。
4　やがてある村を通りかかると，石の下から二匹の親子ねずみがでてきて，子鼠をつれてお伊勢参りに行くように頼まれる。
5　旅費は子鼠が盗んでまかなったのだが，帰りに見つかって子鼠は殺さ

れてしまう。

6　瀕死の子鼠は，お伊勢参りができたので思い残すことはない。感謝のしるしに母鼠がお礼をしようとするが，お金ではなくこの家の宝をと望むように，と言って死ぬ。

7　男は言われたとおりにして，ぼろぼろの頭巾をもらう。

8　その頭巾をかぶると，鳥の話が分かる。それは，京都の禁裏様の病気を治すには，普請の際に屋根に巻き込んだ白蛇と，軒にはさみこんだ蛞蝓（なめくじ）と，土台の下敷きにした蛙とを取り去ることだという内容であった。

9　男は禁裏様の館で占い師を演じ，そのように三匹を取り去ると，禁裏様の病気はたちまち治る。

10　男は褒美に妃のひとりをもらって結婚するが，彼女の首には赤ん坊の時にその男につけられた傷があったという。

[「現象学的還元」と「構造」と「場所」]

これから，この物語を解釈するが，このような物語を解釈する前提，「現象学的還元」とそこから導かれる方法を述べておく。

物語や昔話に限らず，事柄の意味とは，本来，存在全体によって構成されているものである。従って，解釈者の持つ特定の前提的概念を押しつけてその前提に合致するもののみを客観的とするという超越的な独断をしてはならない。まして，まるで「赤信号＝止まれ」というような，ひとつの事柄の機械的置き換えは絶対にしてはならないことである。このような，すべての認識に共通する「あらゆる超越的措定の排除」(E.Hesserl “Die Idee der Phänomenologie-fünf Vorlesungen-” Herausgegeben und Eingeleitet von Walter Biemel, Martinus Nijhoff, 1973, S.5) をフッサールに倣って「現象学的還元（die phänomenologische Reduktion)」もしくは「現象学的判断中止 (epochē)」と呼ぶ。この現象学的判断中止を前提にすれば，はじめに物語で起こったことをそのまま受容することが求められる。

そのうえで，個々の事柄の象徴的意味に関して，辞書，事典類を参考にすることになるが，特にシンボル事典を参考にする場合に顕著なように，事典

中の意味は時として無限ともいうべき多くの意味が記される。その中のどれがふさわしいかは，全体の中で決まることである。そして，その全体の仕組みや構成の状態を表現しているものがなんらかの「構造」である。

構造と個々の事柄の象徴的意味とを組み合わせて，はじめて物語解釈が成り立つが，構造も，全体を表わすという共通点があるとしても，さまざまな構造が指摘されよう。従って，どの構造で解読を進めるのがふさわしいか，という問題も生じるが，筆者は，論理構造に沿った解釈妥当性の常識に照らして，ひとつの構造上に複数の事柄とその意味が論理的整合的に位置づけられたり，ひとつの事柄が複数の構造上で同じ意味と判断される場合には，その意味は妥当していると見做す。

小論では，そのような構造のひとつとして「場所」に着目するのであるが，そのような解釈を可能にするために，場所に豊かな意味付けを与える考え方の根本を，西田幾多郎に拠る。

哲学的なテーマの中核を為す，絶対的な存在そのものを敢えて「場所」と名づけた西田幾多郎の場所概念について，筆者がかつて考察し，西田幾多郎「場所」(大正一五年,『西田幾多郎全集　第四巻』岩波書店，1949／1988，208—289頁）などを用いてまとめたその要点は以下の通りである。

(1) 「場所」とは唯一絶対の存在そのものである。

(2) 個物や個々の出来事，個人，個体などの「個」は場所自身の自己限定もしくは自己規定によって成立する。これが「場所の自己限定」である。

(3) 個の成立は全体としての場所に多様性を与え，場所を豊かに発展させるし，個を通してはじめて全体が認識される。これが「個による場所の限定」である。

(4) この双方における限定は，同時に成立する相互矛盾的運動でもある。しかし，それによってむしろ個と場所との双方の同一性が確保される。この「絶対矛盾の自己同一」的な運動は，現実的には，人類や社会の歴史や個人の生育史に現れている。したがって，歴史や生育史に個や場所の同一性，すなわち本質的な意味が示されている。

(井上義彦・波多江忠彦・荒木正見編『人間，何処からどこへ』ナカニシヤ出版，1998，166—167頁による。)

このように示される「場所」の概念を物語解釈に適用させようとすれば，まず，(1)で示される，場所の絶対性に言及しなければならない。それは、ある物語において，まずはその物語の全体，それは，物語の内容のみではなく，物語が語られる状況，その歴史などをもすべて含んだ全体を指す。

そして(2)のように，その全体から限定された個としての，その物語の特異性に着目しなければならない。一般的にはこの特異性はその成立とともに理解されるが，小論の場合，この特異性は，「昔話」ということになるし，この章の場合は『聴耳』というひとつの昔話ということになる。

さらに(3)のように，「昔話」もしくは『聴耳』が，存在の全体，とりわけこの場合は我々全体に対して与える影響があることになる。それは，小論では，各章の最後に，我々に対する生き方のヒントとでも言うべきまとめとして述べられる。

ところで，このように示される普遍的な存在としての「場所」の論理的な構造は，また，特殊な場所，特定の場所にも内包されなければならない。従って，小論各所で用いられる特定の場所に関する考察も，このような視点から考察することができる。

さて，以上の本質的な考察をふまえて昔話を解釈するのであるが，その具体的な方法は以下のように述べることができる。

第一に，現象学的還元に配慮すれば，全体をひとつのスクリーンに平たく写したような気持ちで，「述語が連続する流れ」として分析するということである。物語であるから，行為の主人公が入れ替わり立ち替わりして全体の流れを作っていくのではあるが，その主語に着目するのではなく，むしろ，述語に着目して，どのような述語が繋がれて物語の全体の流れを構成しているのか，という視点で分析する。そこには，語り手の心の動きの全体が反映されていると思われるからである。

それは，この物語が第一章で述べたような意味での，伝聞による口承文学だということによる。口承文学は，必ず語り手がある。昔話の場合には，その語り手は不特定多数だが，共通の心理というものがある。その心理は，結局は語り手自身の心理の連続になり，その連続を反映するのは，関係を表現する述語の方だからである。

第二に，物語の中で示される当初の目的が実現したか否かに着目する。これはそのままテーマだとも言える。当初の目的とは，裏返せばなんらかの欠如を意味し，表現としてはそのように示されるものである。貧窮であったり，独身であったり，子どもであったり，病気であったり，障害があったり，完全な状態からすれば物語にはさまざまな欠如がある。我々の現実ではそれぞれの欠如を背負ってこそ人間らしい生き方ができるものだし，欠如のない完全な人などというものは存在しないが，物語では，その欠如が満たされる過程が記される。その欠如がどのように満たされていくかが，目的でありテーマであることになる。したがって，はじめに提出される欠如は，潜在的テーマすなわち「モチーフ」だといえる。この欠如が満たされれば，目的の実現としていわばハッピーエンドということになるし，それがうまくいかなかったら，悲劇ということになる。小論のように，昔話から生き方のヒントを得ようとする場合には，このうまくいくかいかないかの理由を考えることが重要な手がかりになる。

第三に，従って，「ホメオスタシス（恒常性），もしくは，発展可能性」が得られたか否か，を確認しなければならない。昔話の場合にはたいてい「めでたしめでたし」と，ホメオスタシスや発展可能性の獲得が表現されているので分かりやすいが，やはり，得られた安定的な状態を確かめることである。「ホメオスタシス」とは，恒常性と訳されるように，有機体が自らの存在を安定的に保っている状態を意味する。物語の場合，その連続性からさらに新たなテーマへと，旅立ちを示して終わることもある。これが，「発展可能性」である。

物語の登場人物もそうだが，先に語り手の心理の流れとして述べたように，物語そのものもひとつの有機体である。安定的な状態と言えば，そのひとつには生命体にとっての死をも意味するが，それはまた別の意味での有機体に変化することである。あくまでも，そのものの同一性，つまり，そのものがそのものとしてあるあり方，を維持した上での安定的な状態を，そのもののホメオスタシスという。もちろん，この同一性という概念も厳密に個々の事柄に適用して考えなければならない。例えば，「肉体としての夏目漱石」はすでにその同一性を失っているが，「小説家夏目漱石」の同一性は現在も安定的

に存在している。このように同一性を論じる場合には，論じる対象を厳密に規定して取りかからなければならない。このような同一性を意識したうえで，その物語において欠如がどのように満たされ，ホメオスタシスが得られたか，さらに，発展可能性にまで展開しているのか，などと考えるのである。

第四に，物語中の「エネルギー」に着目する。先に述べたように，エネルギーとは，小論の場合，有機体が安定的に同一性を維持することを理解する概念として用いる。あくまで象徴的な概念であり，科学的な定義などとは厳密に考えず，生命力，もしくは活力という程度に解しておく。

このような意味でのエネルギーについては，二つの側面から考えることができる。ひとつの側面は，「エネルギーの量的側面」である。物語の場合，休養，食事，睡眠，豊かな暮らしなど，豊かなイメージで表現される状態である。いまひとつの側面は「エネルギーの質的側面」である。これは有機体の統合的あり方で，その有機体の本質に即したあり方，すなわち理に適ったあり方をすれば少ないエネルギーを有効に利用することができると理解する。従って，この質に関しては，知識や知恵が重要な役割を果たす。

有機体の状態や，物語の展開で欠如が充実する方向を目指そうとする時，これらのエネルギーの状態に着目すれば，その実現の可否が予測できる。現実はそんなに甘くないといえるが，物語ではこのような意味でのエネルギーを安定的に保つことで，ホメオスタシスを得るようになっている。また，発展可能性の場合も，このようなエネルギーの充実を前提にして新たな可能性に向かって出発するようになっているといえよう。

第五に，特に場所に着目して解釈する際に，西田幾多郎の概念を考慮して，全体としての場所が個を規定し，また，個が全体としての場所を表現し，その相互運動が，全体としての意味を形成しているというダイナミズムに配慮することが必要である。

すなわち，小論では特に，「意識」と「無意識」とが，場所の普遍的意味と密接な関係があるという前提で述べるが，その場所で行動する登場人物たちやその場所に示されるさまざまな事柄はその普遍的前提の上にまた個々の特有の意味を形成し，そのことが，その場所を解釈可能なレベルへと引き上げ，物語全体のより具体的な解釈を可能にするのである。このことを常に配慮し

つつ個々の解釈を遂行する。

以上のような前提は，元来物語分析の探究から生まれたものであるが，それらを参考にして個々の昔話を分析し解釈していけば，特に昔話の成立上の前提からも，われわれの生き方の参考になると思われる。

[『聴耳』の解釈]

では，『聴耳』は，どのように解釈できるのであろうか。先の前提を参考にして，物語を考えてみたい。

この物語で最後の状態を確認すると，禁裏様すなわち天皇が癒されることによって，主人公が美女と結婚できる，すなわち，独身だという欠如が満たされるということになる。ユング心理学などによると，天皇や殿様，王様は，意識と無意識，すなわち，自覚している領域と無自覚の領域，ということは，本当の意味での世界の総て，の中心，すなわち全存在の中心の象徴である。その中心が癒されるのだから，これは大変な大事業を成し遂げたことになる。

このことは，結婚ということからも言える。当初は野卑で独身の男が，最後には天皇の妃のひとりと結婚するというのだから，破格の出来ごとである。それは，天皇の癒しを助けたからである。「結婚」とは昔話や物語分析では，人格の完成と同義である。したがって，主人公は人格発達し人格の完成を成し遂げたということになる。

このように考えれば，まず，テーマには「癒し」と「人格発達」が示されていることが明らかである。

そして，いま，この物語は，全存在の中心の癒しと人格の完成が同じ意味を持つといえる。これは，共時的解釈の方法を生かした読み方である。

「共時的」というのは，科学的因果性や科学的必然性がないにもかかわらず，なにか相互に関係があるとしか思えないような関係をいう。例えば，一日中，同じ名字の人にしばしば出会うという場合，それは共時的関係，すなわち共時性があるという。この物語の場合，全存在の中心の癒しと人格の完成が同時に起こったのだから，その両者は共時的関係があるという。

では，癒さなければならなかった病いとは何であろうか。この昔話には，禁裏様の病気の原因は，三匹の動物の苦痛であったとされている。物語や映

像や夢の心理的分析において，動物は我々の無意識における動物的要素を意味しているとされる。三匹の動物のうち，蛇は，意識と無意識とをつなぐ働きをするとともに，知恵と本能の両面を持っている。白蛇になると神秘的意味合いが増してくる。蛞蝓は，本能のうちでも原初的な要素を持つ。蛙は，意識と無意識とをつなぐ働きをする。私たちの内面において，これらの諸要素が傷ついていたとすれば，これはかなり重い症状である。

ところで先に，物語の分析は，主語ではなく，述語の流れを見ることが必要だとした。また，物語の全体を共時的な意味関係で見直すことも重要である。そのようにして確認すれば，ここで傷ついている内面的な諸要素つまりは未熟さが，すでに物語の前の部分に現れていることに気づく。それは，赤ん坊に対する殺害未遂と，子鼠の死である。

赤ん坊に対する殺害未遂は，同じ女性との結婚に到る伏線からも分かるように，男の内面の幼い女性像からの決別である。その意味では，男の人格発達を意味するのだが，方法が余りに野卑で幼稚である。このことは，この物語全体の流れに，未熟な要素が流れ続けることを示唆している。けれども，そのきっかけは薬師堂という神秘的な場所で，神仏の密談を聴いたところにあった。ここで，場所の意味に配慮して考察することが効果を発揮するが，これは，神秘的な場所で神秘的な情報を得たわけだから，無意識的なものとの出会いを意味することになる。つまり，そこで話されたことが今後の物語の展開のモチーフになる。神仏が結んだのだから，必ず結婚に至る。ということは，この物語は，もともと未熟なものが，人格発達して結婚に至るということを潜在的なモチーフに持っていることになる。

子鼠の死の状況には疑問が生じる。子鼠も，その母親も，まるで喜んでいるようである。語り手にとっては，子鼠は死んで当然と言わんばかりである。その当然な理由は，ふたつの点から説明できる。ひとつは，子鼠が泥棒をして旅費をまかなったという点である。昔話の場合，善悪は明瞭であり，このような金銭の盗みには罰を与えなければならない。もうひとつは，「癒し」と関係するもっと重要なことである。子鼠は，伊勢参りを済ませてから死ぬのである。場所の意味に着目するならば，伊勢参りというのは，旅を続けて神秘的な場所に至り，祈ることで人間が変わる，すなわち，人格発達すること

を意味するのである。お参りをするまでは，まだ人格発達していないのだから，旅のための盗みも黙認される。しかし，いざ人格発達してしまうと，正義を通さなければならない。語り手の心の中に生じるこのような論理によって子鼠は死ぬのである。共時的に言えば，子鼠の死によって，この物語の全体がぐっと人格発達するのである。また，西田幾多郎の，個が全体としての場所を表現するというダイナミズムを考慮すれば，子鼠の死という感情に訴える個の行為が，物語全体に強い意味を与え，その意味こそが，人格発達そのものであるということになる。そしてそれは，最後の癒しに接近することを意味する。

ということになれば，子鼠の死が同時に，神秘的な頭巾の獲得と一致することも説明できる。物語の全体が大きく人格発達すれば，その人格発達を具体的に実現する道具が必要になる。それが，この頭巾である。『浦島太郎』の玉手箱や，『一寸法師』の打出の小槌など，昔話には一気に結論を導く神秘的な小道具がしばしば登場するが，それらが必ず結論に結びつくということは，それらは，本来の原理原則を象徴しているものだといえる。それぞれの物語の主人公が，物語の中で行った行為の結果が，それぞれの小道具によって具現されるのである。この物語の頭巾は，鳥の言葉を聞くことができた。人間以外の動物の言葉を聞くことができるというのは，知恵を象徴しているが，その知恵は，意識と無意識の全体から必然的に導かれた真の知恵である。語り手の内面において，赤ん坊は傷つけられて幼稚さが死に，今，どこかで着々と美しく人格発達し続けているという思いがある。先に述べたように，赤ん坊を傷つけるという幼稚さは，伊勢参りと，幼稚さを象徴する子鼠の死によってなくなり，物語の全体は人格発達をとげたという思いもある。それらのすべてによって示される人格発達への次のステップが，頭巾によって象徴されているのである。

この頭巾が，最後の難関を取り除いて，すべてが自由に人格発達する。そこではじめて，物語の全体に「癒し」が生まれる。そして，この癒しは人格発達と同義であることになる。

このように考えてくると，『聴耳』には，重要な「人格発達」と「癒し」のヒントが示されている。

それを述べる前に，他の『聴耳』との比較をしておく。

[『聴耳』の比較]

『聴耳』の物語を型として確認するためには，他の地域の話と比較しなければならない。この章は，考え方を確認しつつ述べるという意味合いのある章なので，以降の章では簡略化するこのような比較を試みておく。比較することで，これまで述べてきたことが改めて確認できるはずである。比較する『聴耳』は，比較的構造のはっきりした次の昔話である。

『聴耳』（愛媛県北宇和郡）（『日本昔話大成　3』296頁）

1　ある日若者が鯛を助けた。
2　その鯛は海の王の一人娘だったので，お礼に海の王から龍宮に招かれた。
3　陸に帰る時，土産に「聴耳」という人間以外の言葉が判るという宝をもらった。
4　若者はその聴耳で雀の声を聴いて黄金を手に入れた。
5　次に烏（カラス）の声を聴くと，御殿の姫が病気なのは屋敷の主の蛇が建物の屋根に挟まれて死にかけているからだという。
6　若者は蛇を助け，蛇が助かると同時に姫の病気も治り，やがて姫と結婚した。

この北宇和郡の物語は，『浦島太郎』のように始まり，一見，先の奄美大島の物語と異なるように見えるのであるが，その型において共通のものであることがわかる。特に，場所の構造的意味の共通性にはそれが顕著だし，他の概念においても小論での方法を用いると，ほぼ同じことを示しているとさえいえる。以下，ストーリーに添って，それを確認していく。

若者が鯛を助けたのは，無意識的なものとの関わりの開始である。奄美大島の場合は，薬師堂だったのが，ここでは海およびその中心の龍宮という神秘的かつ無意識的な存在となり，神秘的な情報は鯛が女性だったということになる。奄美大島の場合は，その情報の赤ん坊がそのまま将来の結婚相手にな

るが，北宇和郡の場合は，語り手の内面のみで結婚というモチーフが示される。しかし，この語り手の内面のモチーフということになれば，双方ともが同じ型を持っていることになる。

次に「聴耳」を手に入れる状況であるが，双方に共通していることは，いずれも無意識の要素を意味するもの（鯛，鼠）からの恩返しによることと，神秘的な場所（龍宮，伊勢神宮）が関係するということである。これは，無意識の中心まで到達して変化し，その結果，恩返しという形の，人格発達を得たことを意味する。

次に，雀の声を聴いて金を手に入れる点については，奄美大島では触れない。しかし，結局は褒美を手に入れることになる。

そして，双方に共通しているのは，動物が閉じ込められて病んでおり，それが解放されることによって，高貴な人が癒され，主人公に幸福と結婚が訪れるという結末である。動物が閉じ込められて病んでいるというのは，先にも述べたように無意識的な要素が傷ついていることを意味する。それを動物の言葉を解読して知るというのであるから，これは，意識と無意識とを貫く真の知恵を発揮する，つまり，生存や存在の原理原則を発揮するということを意味する。

つまり，「聴耳」という道具は，この生存や存在の原理原則を象徴するものだということになる。

こうして比較してみると，表面上異なる話でも，共通の型を持つことが分かるし，その共通の型は，共通のテーマを表現していることが分かる。

そのテーマを一言で言えば，「無意識的な構成の変化による人格発達に基づく癒しと至福」だといえる。

では，このことを導くために小論で用いる概念はどのように働いたのであろうか。

「場所」「退行」「再統合」「エネルギー」という概念を用いて，もう一度，この『聴耳』の物語を見直すと，先の分析に加えて，次のように補うことができる。

まず，薬師堂という神秘的な場所や，海や旅という未知の場所は，退行する場所である。無意識に入り込んでいるので，日常の意識的な活動では知るこ

とのできない事柄や，感情を知ることができる。しかも，ここで知られる知識の中で，神仏，天皇，殿様，老人，先生，リーダーなどの中核的存在や，寺社，龍宮などの神秘的な場所の中心において得られた知識は，意識無意識の全体の構成によって生じた中心的知識であり，原則的には真実であるといえる。従って，薬師如来と出雲神が密談した内容は，結局実現するし，伊勢神宮にお参りすれば，物語の幼児的要素としての子鼠が死に，そのことで物語全体が人格発達し，同時に画期的な知恵の象徴たる「聴耳」を手に入れるのである。また，龍宮に至っても同様に「聴耳」を手に入れることになる。

ここで，エネルギーの問題を考えてみる。いずれも「聴耳」を手に入れたのだから，エネルギーは充実していたはずである。それは，どこに示されているのであろうか。少なくとも，エネルギーの量が満たされる記述は見あたらない，とすると質の問題になる。では，質の高さを現わす表現があるのだろうか。それは「感謝」である。何か善いことをすれば感謝される。この善いことができるというのは，質の高さを意味している。われわれも日常，「人間の質が高い」ということと「善い人」というのを同じ意味で使う。『聴耳』のふたりの主人公は，それぞれに行為は異なるが，いずれも感謝されてその結果「聴耳」をもらっている。その時，語り手には，この主人公の質を高く述べたいという意志が働いているはずである。

さて，「聴耳」を手に入れて，それを利用する仕方はほぼ同じである。先にも述べたように，それは，意識無意識の全体を見通す，日常を超える知恵や知識を意味する。なぜそのようなものが手に入ったかといえば，退行し，善いことを行い，質の高い再統合を得たからである。

もちろん，禁裏様の館も，御殿も，無意識の中心で，本来は全体のホメオスタシスの中心が健康に存在しているはずの場所である。その中心が病んでいるというのは，意識無意識の全体の構成が病んでいることになるが，意識的な象徴でもあれば一目瞭然，原因を取り除くことができる。この場合，それは動物で示される。退行してはじめて気づく無意識の要素が病んでおり，その原因が分からなかったのである。そこで，意識無意識の全体を見通す知恵や知識の出番となる。神秘的な「聴耳」を信じるためには，人は退行しなければならない。意識的な殻が固かったら，説明のできない神秘的対象は理解

できないからである。

こうして無意識的な原因をとり除けば，当然，全体は高いレベルの再統合を得ることになる。それは同時に，すべての欠如が満たされることを意味し，独身の主人公は，高いレベルの結婚に至ることになる。

[『聴耳』と「人格発達」および「癒し」]

では，この物語から得られる「人格発達」や「癒し」のヒントはどのようなものであろうか。

まず，最も大まかなことからいえば，奄美大島の場合，この物語の癒しが，未熟さからの癒しであるのだから，未熟さを脱しなければならないということである。「人格発達」こそが「癒し」に繋がる，ということでもある。この例では，それは，赤ん坊への殺害未遂や子鼠の死という刺激的な設定になっているが，その行為が次のより成熟した段階に繋がっている。

次に双方に共通する重要な契機と言えば「聴耳」の獲得だが，その箇所を振り返れば，善行を施すことを契機として退行し，しかもすみやかに現実においてそれを利用しなければならないといえる。ここで重要なのは，善いことをして無意識の構成を充実することと，退行の期間である。先に述べたように，退行は混乱状態でもあるため，エネルギーを消耗する。従って，そのまま退行していると帰ってくることさえできなくなる。時間をかけ過ぎて，帰ってきた時には，時すでに遅し，というのは『浦島太郎』である。そこで早急に，意識の世界へと帰ってこなければならない。善行をするなどというように，無意識の構成が充実していれば，このような，退行からの還帰が早くなり，その分，次の人格発達へと向かうことができるといえる。

こうして，退行と再統合を繰り返し，徐々に高い統合を得て人格発達をすることになるが，その場合重要なものはやはり知恵や知識ということになる。それも，この物語でも示されるように，退行と再統合の過程において得られた知恵や知識である。退行の際に得なければならない知識は，神仏や竜王が登場するように，絶対的な原理や原則，すなわち生存原理に則した知恵や知識でなければならない。極度の恐怖心を伴ったり，人格の尊厳を損なったり，ただの一時的な気晴らしだったり，極端な減量を長期間続けたり，正常な日

常生活の感覚を失うような，特殊な娯楽や特殊なスポーツなどに関する知識のように，一見，退行して得られる知識のように見えても，生存に反するような知識，つまり，人がそのままそれを続けていけば次第に死が近づいてくるような行為を勧める知識は，実は，意識過剰の偽の知識だといえる。われわれが求めなければならない知識とは，われわれがそれを続けることによって我々の生存が維持され，発達できる行為に関する知識でなければならない。このような知識によって人格発達してこそ，真の癒しが得られるのである。

この『聴耳』の物語から「癒し」についてわれわれが示唆されるヒントは以上のようなものである。以下，他の昔話の解釈を通して，さらにそのヒントを得る。

第三章　『瘤取り』における「癒し」

この章では，「退行」と「再統合」の型が明瞭に示される『瘤取り』を分析して，心身に障害を持つ場合の癒しの条件の一端を考える。なお，この物語には，「人格発達」のテーマは明瞭には示されない。主人公に老人を設定することによって，語り手はそのテーマを無意識的に避けたとも考えられる。しかし，それだけに「癒し」のテーマが明瞭に示されることになる。

[『瘤取り』の典型]

『瘤取り』は昔話の中でも代表的なものだけに，各地でさまざまな変容が起こっている。鬼であったり天狗であったり，『鼠浄土』の話と合体したりする場合が多い。ここでは，典型として，最も単純で，他との共通性が高い，大分県宇佐市の例（関敬吾編『日本昔話大成　4』角川書店，昭和53年，264頁），長崎県下県郡の例（同264頁），島根県大原郡，仁多郡の例（同265頁），および『宇治拾遺物語』の三『鬼に瘤取らるる事』（『新　日本古典文学大系四二』岩波書店，1990）などを参考にひとつの物語として紹介する。

『瘤取り』（大分県宇佐市，長崎県下県郡，島根県大原郡・仁多郡）

1　瘤のある爺が山仕事に行く。

2　雨が降ってきたので，木のうろに入って寝る。
3　目をさますと夜になっており，近くで鬼（天狗＝この論文では鬼にしておく。）が宴会をしている。
4　彼らの踊りをみているうちに爺もたまらなくなり，つい飛び出して踊る。
5　鬼たちは喜び，帰ろうとすると，瘤を取って，あしたも来るようにという。
6　隣の爺がこれを聞いて，鬼の宴会に飛び出して踊るが，下手なので瘤をつけられてしまう。

[『瘤取り』の解釈]

この物語には，ひとりの爺の瘤が取れたという点で，明瞭な癒しのテーマが含まれている。なぜ，瘤がとれたのか，それを「場所」「退行」「再統合」「エネルギー」などの概念を手がかりにして考えていく。

ところで，はじめに物語解釈の方法の一端から考えれば，この物語には明瞭な対比構造を指摘することができる。対比構造には，比較においてテーマが内包されるのが常識であるが，この場合もそれを確認することができる。

それは，ふたりの爺の存在である。片方は瘤が取れ，片方は瘤がつけられてしまったのである。しかも，瘤がつけられた隣の爺もさほど悪いことをしたとも思えない。太宰治も昔話をもとに独特の風刺をこめた作品『お伽草子』で，「この物語には所謂『不正』の事件は，一つも無かったのに，それでも不幸な人が出てしまった」（新潮文庫，昭和四七年，227頁）と述べている。しかし，先に述べた昔話の性格を考えれば，やはり，この隣の爺はなにか悪いことをしてしまったと考えられる。その悪いこととはなんだったのか，それはなぜ悪いのか，それを考えることが癒しの手がかりになるのではないか。従って，このふたりの爺の対比の考察をしつつ，以下の考察を進める。

まず，「場所」を考慮して，癒しという点から，それが行なわれた場所について考えてみる。瘤が取れて，爺が癒しを得るのは「山」という場所である。「山」は無意識の象徴だから，ここで退行が起こっている。従って，語り手としては，エネルギーが消耗することをどこかに意識しているといえる。雨がふってきてエネルギーの消耗は進む。長崎県下県郡の場合には単に「日が暮

れた」(『日本昔話大成　4』264頁)となっているが，エネルギーが消耗する状況という点では同じことを考えているといえる。

ところでこの爺は「木のうろ」という更に深い無意識へと退行する。しかしここで彼は眠り込んでしまう。眠りはエネルギーの充実を意味する。物語の展開として，次は鬼との遭遇というエネルギーを消耗する大変な事態が待っているのだから，その後に予想される新たな統合を，高いレベルのものにするためにも，ここではエネルギーをたっぷり蓄えておかなければならない。

やがて，鬼の宴会が始まる。この物語では，宴会と踊りは最もリラックスした状況なので，退行の極だといえる。そこでは，鬼のような超現実的なものが出現する。この鬼については，のちに詳しく述べるが，結論から言えば，この物語の場合は生存原理を意味している。

この爺は，眠った後エネルギーが満ち足りていたこともあって，自然にこの退行に向かう。『日本昔話大成　4』における山形県新庄市の例(260頁)では，面白そうで黙っていられなくて踊りに参加したと語られるし，鳥取県東伯郡の例や石川県珠洲市の例(266頁)や新潟県西蒲原郡の例(267頁)などは，踊り好きな爺と語られている。これらは自然な退行を表現しているといえる。

そのような自然な気持ちで踊れば，当然，鬼たちにとっても心地よく，物語の全体が楽しくなる。この楽しさこそが「癒し」である。そこで，この物語の帰結では，もともとあった身体症状における異常な要因がとり除かれることになるのである。

では，これに対して，隣の爺の場合はどのように解釈すればよいのだろうか。

まず隣の爺は，瘤を取る，という目的意識を強く持つ。この目的意識を貫こうとするところに，無理が生じる。はじめの爺と違って，意図的に木のうろに隠れる。眠ってエネルギーを蓄えるどころではなく，今か今かとエネルギーを消耗して鬼を待つ。そして，鬼の中に出ていくが，新潟県栃尾市の例のように(267頁)，「無理に」出ていくのである。『宇治拾遺物語』では「おそろしと思ながら，ゆるぎ出たれば」つまり，恐ろしいと思いながらも身体を震わせて現れた，とされ，「天骨もなく，おろおろかなでたりければ」つま

り才能もなく下手糞に演じてしまったのでとされるように(『新　日本古典文学大系　四二』12―13頁)，緊張のあまりエネルギーが消耗した様子が描かれている。これだけエネルギーを消耗していては「癒し」はありえない。鬼たちは，別に悪事を働く意図ももなく，ごく自然に隣の爺に不幸な身体的条件を与えてしまうのである。隣の爺は「癒される」ばかりか，もっと悪化した症状を得てしまうことになる。

[『瘤取り』と「癒し」]

このような物語を理解する場合，昔話が語り手の心理の表現であることを考えれば，そこで記される状態は，そのまま直接的に理解してはならない。この物語でも，身体症状として記されるが，あくまで，心理的な地平で述べられる意味での異常な事態であって，現実的な身体の状態を直接指すわけではない。従って，ここでとりたい「瘤」とは，単に物質的な意味での瘤ととるのではなく，心身の全体における何らかのアンバランスと理解しなければならない。以下，一応はこの物語の言葉を用いて解釈するが，実際には，以上のような意味で述べていることを前提にしておく。

『瘤取り』から導かれる癒しへのヒントは，まず，自然な退行を心がけることだといえる。しかし，自然な退行ほどむずかしいものはない。「自然な」退行ということを，ただ単に自分の思うままに，とか，自分にとって心地よいからなどという理解で行ってはならないからである。自然という言葉が，天然自然という意味にも適用されるように，本来「自然に」という言葉には，自分のわがままではなく，客観的な普遍性との合致というニュアンスがある。『宇治拾遺物語』では，この爺が踊りに飛び出していく際に，「ものの付たりけるにや，又，しかるべく神仏の思はせ給けるにや」(『新 日本古典文学大系四二』10頁）と，自分の意志ではないことと，神仏という客観的な存在との関わりとの双方を暗示している。また，この物語で，そのような客観的な判断をし，普遍的な目安の役を果たし，具体的な行為を行なったのが，鬼や天狗であった。この物語では，鬼や天狗は，意図的な悪事はしない。隣の爺に瘤をつけるのも，返してあげるという意識である。つまり，鬼や天狗こそが，自然に行動しているのである。場所のありかにおいても，無意識の中心に存

在するものとして表現されるし，その述語的意味においてもまた，鬼や天狗は，生存原理そのものだといってよい。

退行しているときこそ，真の生存原理が必要である。一般に，退行している時には，何が本当に自分にとって必要なのかがわからない。退行しているつもりで，実はただ単に自分のコンプレックスに振り回されて遊んでいる時に，生存原理のことを言われると，逆に厳しく感じ，反発し，恐怖心さえ感じるものである。しかし，その時こそ本当に必要なのは，真の生存原理である。月並みな言い方かもしれないが，その時こそ，勇気と愛をもって，生存原理を伝えることが求められる。

東北地方の『瘤取り』には，この生存原理を意識して，神秘的な対象に祈るところから始める例が多いようである。福島県南会津郡の例では，天狗にとってもらう仕方を習うのに，社に祈願している（268頁）。また，宮城県登米郡の例では，神様の使いの鬼，と明確に語られている（269頁）。

もし退行している時に，このような真の生存原理に出会えなかったら，それはいずれ，自覚しないままに重要な病に陥ったり，反社会的な人格を形成したり，非人間的，非現実的な生き方に陥ることになる。非行グループや，事件に結びつく団体や，非社会的なことを是と言わしめる集団や，反社会的な集団といわれるものなどは，退行させながら，真の生存原理に出会わせるのではなく，えせ原理を押しつけているにすぎないのである。それは，結局は，隣の爺でしかない。自分では上手に踊っているつもりでも，実際には，生存にとってとても危険な状態にあるといえる。

このような場合の目安は，先ほどの社会性や日常の常識性などだが，その場合常に，生存を延長できる方向を向いているのか，を考慮しなければならない。

こうして，『瘤取り』から，癒しのヒントを得たといえるが，似たような昔話でも同様な解釈が成り立つのであろうか。次章ではその例を考えてみる。

第四章　『手斧息子』における「人格発達」と「癒し」

この章でも，心身のアンバランスを身体的な障害として表現されている昔

話の例を，「場所」「退行」「再統合」「エネルギー」などの概念を利用しつつ解釈し，「人格発達」や「癒し」の問題を考えてみたい。先の『瘤取り』よりは，たくましい話である。

[『手斧息子』の典型]

『手斧息子』という昔話がある。生まれつき身体の一部が手斧（ておの）や鉋（かんな）になっている少年の話である。心身のアンバランスを表現する場合，同じように身体症状で表わすのに，『瘤取り』は「瘤」をただの厄介ものとして表現しているのに対して，『手斧息子』は，その症状を道具として活用して自分の人格発達を助けるという，積極的な話である。主に鹿児島県に伝わる話だが，その典型的な例を紹介する。

『手斧息子』（鹿児島県大島郡沖永良部島）（『日本昔話大成　3』44—47頁）

1　ある村に，脛に手斧（ておの）が手には鉋（かんな）が生えている少年がいた。
2　少年が過失で人を傷つけて困るので，親は少年に船を作らせて海に流す。
3　少年は鬼の島に着く。
4　少年が鬼の家にしのびこんでみると，大鍋には人間が煮られている。
5　少年は樽の味噌を食べてしまい，糞を入れる。
6　少年は塩甕の塩を捨て，自分が隠れる。
7　鬼が帰ってきて，塩を取ろうとすると，少年の鉋で手を傷つけてしまう。
8　鬼は味噌を食べようとして，糞を食べる。
9　鬼は少年を発見して追いかけるが，少年は逆に脛の手斧で鬼の大将を殺す。
10　鬼たちは宝を船に積み込んで逃げるが，少年はその船に隠れる。
11　鬼たちの前に少年が現われると鬼たちは海に飛び込んで逃げる。
12　少年は宝を持って帰るが，両親はまた人を傷つけないかと悲しむ。
13　少年が宝を家に運び込んでから，川に入って水を浴びて，川石で手足

をこすったら手斧も鉋もとれて，りっぱな男になった。

14　親を大切にして，よい暮しをした。

[『手斧息子』の解釈]

この物語は，身体にハンディがあった少年が，冒険の結果，治癒したというものである。この癒しが，最後の場面で，ただ単に「川に入って水を浴びた」だけで行われたのには，全体の筋から必然的な理由があるといえるし，「場所」の意味に着目すればそれを具体的に考えることができるはずである。これを，「場所」「退行」「再統合」「エネルギー」などの概念を参考にして考察する。

まず，少年は，不運な姿をしている。両手両足に刃物が生えているということだけをとってみれば，さまざまな象徴的意味を考えることができるが，その後に起こった出来ごとに，この物語におけるこのことの意味がこめられている。

このような象徴的な事柄や出来事を分析したり解釈したりする場合には，とかく，事柄そのものについて，分析したり解釈したりする人の主観や好みや，個人的な情報が投影されやすく，つい，自由な思い込みで意味を説明してしまう。しかし，先に「現象学的還元」とその概念から展開させて述べたように，事柄の意味は，表現の内にこそ示されているものである。そのような発想をもって，分析や解釈を行おうとする場合，当の事柄がどのような出来事を引き起こしたのか，どのように修飾されているのか，どのような述語を持っているのか，など，当の事柄にまつわる具体的な情報から，その意味を組み立てていかなければならないことを述べてきた。これは，物語に限らず，日常の場面でも同様である。少年非行の場合に，しばしば，「うちの子にかぎって」という親の思い込みが，少年のアンバランスを見落としていることを指摘されるが，「うちの子」がどのような行動をとっているのか，どのような生き方をしているのかなど，具体的な観察を丁寧に行っていれば，「うちの子」の真の姿が理解され，アンバランスがあれば，早めに対応できるはずである。

さて，『手斧息子』の場合，身体のハンディによって起こった出来ごとは，

他人を傷つけることと，それによって追放されることである。つまり彼の姿は，当面のところ，生存にとって不利な状況である。

ここで「場所」の構造に着目すれば，少年は，そのハンディを背負ったまま海に流されるのである。親から徹底的に離されるというのは，「自立」のテーマであり，陸や村と対比されるとき，海は無意識や識閾下を意味するので，ここから「退行」が開始するが，この退行は自立するための，すなわち大人になるための退行だということになる。つまり，人格発達を目指す退行なのである。

ここで，エネルギーを考える。少年は海に流されるに当たって，すなわち退行が開始されるに当たってエネルギーを得たのであろうか。先にも述べたように，エネルギーを得ていないと再統合が困難になる。

海に流されるに当たって，その船は少年自身によって造られたものであった。ここが重要である。昔話や英雄伝説や神話の場合，エネルギーは本人が造り出し，本人が使用するのが原則である。この原則にそったときには，概ねハッピーエンドになる。この原則からいえば，少年は自らを流す船を造った時点で，エネルギーを得たことになる。そして，この物語の特徴である，身体に手斧と鉋をつけていることが，この船を造るのにおおいに役立ったのである。このように，すでにハンディをエネルギーの獲得に利用している。これは，この少年の，むしろハンディをこそ活かした積極的な癒しがすでに潜在的に始まっていることを意味する。

鬼の島での冒険は，「場所」の意味からいえば，鬼の島が無意識の極，すなわち退行の極であるだけに，さまざまな象徴的意味を持っている。

まず，人間が煮られているのは，物語全体の「死と再生」を暗示する。「死と再生」とは，物語中のそれまでの状況が終わり，新たな状況が生まれることを意味する。「死」の段階は，このように死体や骸骨で表現されたり，枯れ木や切り株で表現されたりする。また，「再生」は，赤ん坊や幼児で表現されたり，苗や芽吹きで表現されたりする。「死」の段階でエネルギーがあれば，大きな「再生」，すなわち高いレベルでの人格発達，さらには質の高い再統合が得られる。この物語では，人間が煮られている場面のすぐあとに，主人公がエネルギーの量を満たすための「味噌を食べてしまう」という行為を準備

している。また，塩甕の塩を捨てて自分が隠れるのは，後の行動からも分かるように，知恵，すなわちエネルギーの質を象徴している。こうして，この物語では着々と，高いレベルの人格発達すなわち質の高い再統合が準備される。

鬼との戦いは，物語全体の葛藤を意味する。対立的な要因相互の戦いとみてよい。生存原理にかなった方が勝てば，ハッピーエンドになり，そうでなければ悲劇になる。この物語は，結果がハッピーエンドなのだから，鬼にとっては不利な条件が重なる。塩を取ろうとする鬼は，隠れていた少年の鉋で手を傷つける。これは，鬼にとってはエネルギーの消耗である。それが，本来，少年の生存を妨害したハンディによってなされたことに注目しなければならない。少年はハンディを逆に利用することを覚えたのである。これが知恵の発揮である。すなわち，エネルギーの質の充実を意味する。味噌を食べようとした鬼は糞を食べさせられる。これは，まともな食事ができなかったという意味では，鬼のエネルギーの量的な消耗である。また，不潔なものを食べたという意味では，エネルギーの質的な消耗である。そして，鬼の大将との一騎討ちでは，逃げたとみせかけて脛の手斧でやっつけてしまう。先程と同様，知恵を用いてハンディを逆に利用して，勝利を得るのである。鬼の大将が死んだので，これで，少年にとっての死と再生は実質的には終わり，共時的にはすでに成長しているといえるが，昔話なので，具体的にわかる形で終結へと向かわねばならない。

鬼の島から海に漕ぎ出す鬼の船は，場所の方向の意味から言って再統合に向かっている。従って当然，少年にとってふさわしい宝物という土産が手に入り，そのまま，陸の村へと帰って来る。この場合の宝物はもちろん，成長そのものである。これで，図式的な再統合はできたはずだが，この物語のテーマ，すなわち，少年の持つハンディについて決着を付けなければならない。手斧も鉋も，少年にとってもはやハンディではない。それで，川に行って川石でこするだけですっかりきれいになると表現されるのである。「場所」の意味としては川は退行の場所であり，同時に神秘的なエネルギーが流れてくる場所でもある。

こうして，この少年の物語は，生まれつきのハンディを克服するばかりか，

むしろそれを利用して，自分の成長を成し遂げたという物語でもあることが明らかになった。

[『手斧息子』と「人格発達」および「癒し」]

この物語はどのような癒しなのかを考える場合，先にも述べたように，昔話におけるハンディは，表面的な表現そのままのハンディを意味しているとはとらないことを確認する。あくまで，心身の全体におけるなんらかのアンバランスだと捉えるべきである。従って，このようなハンディはすべての人に存在すると言わなければならない。そして，普遍的な型を伝える昔話のこのような自己のハンディを超える仕方は，我々すべてにとって必要なものだといえる。

ふりかえって，「癒し」という視点から確認してみると，まず，全体を貫く重要な姿勢として，ハンディに負けないという意気込みが必要だといえる。この少年は，身にふりかかる不幸や不運に対して，常に前向きに取り組む。人に迷惑をかけるとはいえ，親に捨てられて海に流される状況は，先にも述べたように，自立と退行を意味する物語上のレトリックではあるにせよ，当人にとっては衝撃的な出来ごとである。それをひとつひとつ素直に受容し，さらに生き抜くための工夫を繰り返す。結局はそれが，エネルギーの質，量の双方にわたる充実を導き，人格発達を招き，結局は癒しに至ることになる。

このように，この少年の行動で目立つのは，いつも工夫をしているということである。鬼の島でのさまざまな工夫が，彼を勝利へと導いたのである。これは，知恵の発揮，すなわち，エネルギーの質を整える工夫だと言える。

その際，彼のすぐれた点は，ハンディを武器にするというところにある。当初，村から追放される原因にまでなった身体的なハンディを，彼なりにうまく利用して，相手をやっつけるのである。

その結果，宝物つまり成長を手に入れ，ハンディがハンディではなくなったという，つまり，癒されて普通の身体になったということに至るのである。

このことは，我々の生き方に重要なヒントを与えてくれる。我々はだれしもなんらかのハンディを背負って生きている。このハンディは，要するに心身のアンバランスなのだから，たとえどんなに不安定な身体症状であったとし

ても，物質的な形の問題ではなく，結局は内面的な受け取り方の問題である。従って，形は変化しなくても，成長し人格発達するにしたがって癒されることも多いのである。この，人格発達による癒し，がこの物語のひとつのテーマである。

それに加えて，この物語は，さらに積極的な癒しを提起する。それが，ハンディをこそ武器に使って，高いレベルの人格発達と癒しに結びつけるというものである。人類の歴史の一側面においては，古来，重いハンディを背負った人々を大切にする文化があった。それは，ハンディがあるからこそ，ハンディのない人々よりも優れた能力を育て，発揮することが出来るからである。視覚障害の方が，どれほど注意深く身体中の感覚を研ぎ澄まして生活されているかについては，よく言われることだが，実は，すべての人が，なんらかのこのような，自分だけの感覚を持っているはずである。完全な人はだれもいないのだから。

この『手斧息子』が教えるように，我々も，自分のハンディをマイナスに捉えて落ち込んでいるのではなく，むしろそれをこそ生かして成長と癒しに結びつけたいのであるが，そのときこそ，本当に必要なものが，エネルギーだということに気づく。とくに，工夫する知恵，すなわちエネルギーの質については，十分に配慮する必要があるといえる。これは，社会や自然を含む全体のエネルギーの問題である。

さて，この物語ではこのように主人公の知恵が，戦い，すなわち内面の葛藤に克つ重要な役割を果たしたが，知恵を生かして戦わないで癒され，人格発達を遂げる場合もある。次の章では，その例を考えてみる。

第五章　『躄長者』における「人格発達」と「癒し」

この章では，特に「エネルギー」の質について，超越的なものにゆだねて「人格発達」と「癒し」を得る例をとりあげる。この場合も，「場所」に着目すると，「退行」と「再統合」との関わりが理解しやすくなる。

[『躄（いざり）長者』の典型]

『躄長者』は，基本的には，娘が，神仏のお告げによって，貧しく足の不自

由な人のところに嫁にいったら，やがて金持ちになり亭主の足も癒ったという型として伝えられている。『日本昔話大成　3』では，青森県八戸地方の例が典型として掲載されている(169—170頁)。また，これに対して，島根県邑智郡の例は，鴻池の先祖の話として，足が不自由で貧しかったところに，下関の長者の娘が嫁に来た，という型になっている（170頁)。また，新潟県見附市の例は，足が不自由なのは嫁の方で，その嫁入り道具によって金持ちになる（170頁)。福島県双葉郡の例もこれと同様な型だが，足の不自由な嫁が鴻池の娘ということになっている（170頁)。この中で，はじめのものをこの章では典型とし てとりあげる。

『躄長者』（青森県八戸地方）

1　いい娘がいた。

2　娘が嫁にいきたいと神に祈ったところ，夢の中で，橋の下の躄のところに嫁にいくと金持ちになるとのお告げがある。

3　娘が町にいくと，橋の下に躄の男がいた。

4　男が断るところを娘は無理に嫁になる。

5　川に水を汲みにいくと酒樽が流れてきたので，ふたりで呑む。

6　男が湯にはいって髭をそるといい男ぶりになる。

7　男が持っていた行李には大金が入っていたので，酒屋を始め，家を建てる。

8　嫁の実家がある村の人たちが，躄の婿を珍しがって見に来るたびに酒を呑むので，店は繁盛し金持ちになる。

9　金持ちになると躄が癒る。

10　本当は男の実家は大富豪で，息子が嫁を貰い，店もうまくいっていることを聞きつけて，船に米や金を積んで，一層大規模な援助をする。

11　拾った酒樽からはいつまでも酒が湧いたというが，それは神に授かったものだった。

[『躄長者』の解釈]

この物語には，結婚したという点で，「人格発達」のテーマが含まれ，不自

由な足が治癒したという点で，「癒し」のテーマが含まれている。さらに，大富豪になったという大きな至福も示されている。さらに，始めと終りから，神の加護という考え方が流れていることがわかる。その背景には，橋の下，川などという「場所」が示される。これらを手掛かりに考えていくが，この章でも「退行」「再統合」「エネルギー」などの概念を手がかりにする。

はじめに物語解釈の方法から考えれば，この物語には，先にも述べた，神の加護という概念が背後に流れている。神のいう通りにすれば，日常的には躊躇するような結婚をしてもうまくいくということである。では，神の加護や神のお告げというものは，どのように解すればよいのだろうか。

この典型例において，お告げが夢に現われたというのは，象徴的である。夢を見る時は睡眠中なので，退行していることはいうまでもない。退行とは，意識無意識の境界があいまいになり，全体が混乱している状態であったが，このように混乱している時こそ，本来の問題が現れやすい。なぜなら，問題というものは，良きにつけ悪しにつけ，心身の平衡状態を破るなんらかの緊張であり，退行してほとんどの緊張状態が解けた時こそ，最も強い緊張である当面の問題が現れるのだといえる。したがって夢は，当面の問題意識の現れだといえる。

このように考えると，夢はまた，これから実現することへの準備状態を示すものでもある。つまり，意識無意識の全体にとって，最も緊張している事柄が現れているのだから，それは，いずれ近いうちに，具体的に分かる姿として現れてくると考えられるからである。しかし，夢に対しては夢の言語の翻訳とでもいうような独特の解釈をしなければならない。例えば，Aさんと結婚した夢を見た場合，夢を見た人がAさんに対してどのような印象をもっているかを確認した上で，その印象に相当する人格的特徴が，夢を見た人に備わる，と解釈する。この解釈の行く末として，現実のAさんとの結婚に結びつく場合もあるが，Aさん抜きに実現する場合もありうる。

また，夢を見ることが退行の一形態である以上，夢を，吉兆にするためには，つまり，夢という象徴的な知らせを生存にとって優位なものとして実現するためには，エネルギーを充実させる必要がある。もちろん，これまで述べてきたように，それは，量と質の双方から考えなければならない。

この物語の場合，神に祈るという行為から始まっているので，無意識的ではあるにしても全体的な構成としては，良い結婚の実現を目指して準備が進行しているはずである。つまり，エネルギーの質的充実を神への祈りとして獲得していたといえる。

そこで示されたのが，このお告げである。お告げの内容は，ハンディのある結婚ではあったが，娘はそれにすなおに従って行動する。その結果，ことごとくうまくいくことになるが，実は，神の庇護があったのだということが，酒樽のエピソードでわかる。これは，娘の側から言えば，神という超越的なものを利用して，エネルギーの質を高め，癒しと至福を得たということになる。

次に，「退行」「再統合」とを，「場所」と関係づけながら考えてみる。

はじめに娘がいたのは「田舎」のようだが，足の不自由な男がいるのは「町」である。田舎と町の対比は，物語の場合には，より意識的な発展を意味する。従って，娘が町に出かけるのは，基本的には意識的な発展に向かって進んでいることを意味する。

ところが，男のいる場所は「橋の下」である。これは，退行している場所である。退行している場面では，幼児化していたり，未発達なわけであり，男の身体が不自由であっても，今後の発達可能性を秘めているといえる。また，「場所」の象徴的な意味としては「橋」は過渡的な状態を表わす。その意味でも，男の将来に向かった可能性が秘められているといえる。このような象徴理解は，物語の背後に潜在的に流れていることではあるが，娘が神のお告げを信じきって強引に結婚する姿に，語り手も聞き手も，むしろ今後の発展を期待できるのは，このような象徴理解が潜在的に行われているからだといえる。

重要なのはその次である。川を流れてくる酒樽は，あとから，神からの授かりものという説明がされるのであるから，神秘的な役割を果たす。その酒でふたりは三三九度をするのであるが，この儀式は，通過儀礼，すなわちイニシエーションと呼ばれるものである。人は成長する時の節目節目に儀式を行う。それまで少しずつ変化しながら成長してきたものが，儀式を行うことで一段階上のレベルに達したことを確定するわけである。このような儀式を

通過儀礼，もしくはイニシエーションと呼ぶ。退行と再統合という，小論で用いる目安からいえば，通過儀礼は，再統合のための儀式だともいえる。そして，この，結婚を意味する儀式はもちろん物語解釈の常識からは，「人格発達」を遂げたという意味を持つ。ところで「場所」の意味からいえば，「川」は無意識的な場所であり，流れてくるものは，神秘的な意味合い，つまり，エネルギーの質の充実という意味が含まれる。この場合は酒なので，エネルギーの量をも満たすことになる。「人格発達」も遂げていることだし，これだけ条件が揃えば，いずれは男の不自由な足が癒されることは予測できるが，この物語ではここまでのところはまだ，「いい男ぶり」でとどめている。物語の興味と進行上，もっと大きな至福を準備しているからだといえる。

男は実は金持ちだったのである。これは，各地に伝えられている昔話を比較しても，足の不自由な側が本当は金持ちだったということになっている。「本当は金持ち」というのは，すでに「人格発達」を遂げているということとともに，潜在的な可能性を意味するが，それは無意識の持つエネルギーの大きさを意味する。もう少し踏み込んで言えば，目先の姿ではなく，表面からは見えにくい真のすばらしさを意味している。

そのすばらしさが，「場所」の意味からいえば，町という発展的で意識的な場所での，酒屋の開店と家の新築という，社会人として一人前になることに現れる。そして，それまではただのハンディだと思っていた不自由な足が，商売繁盛のための武器に転じるのである。足の不自由な婿を見に来る，などというのは，人権侵害もはなはだしいのであるが，昔話という架空の話だということを前提に語られる場合に，それがややゆるやかに感じられるのは，実は，具体的なそのことを指しているというより，そのことによって象徴されている内容，つまり，この本で分析しているような内容について理解しているのだという暗黙の了解があるからだと思われる。ハンディを武器にするというのは，前の章の『手斧息子』でも述べたように，重要な癒しの方法だし，我々すべてが抱える何らかのハンディを乗り越える方法でもある。

さて，ここで金持ちになると同時に，足が癒る。語り手はここでエネルギーが充実したことを告げたいのである。そして，普通ならここで物語はおわるはずだが，この典型例の場合には，もっと大きな至福をつけ加える。最後

の言葉が手がかりになるように，それには理由がある。これまでのことはすべて神の加護によるものだったというのである。つまり，この分析のはじめに述べた，神のお告げの意味をわきまえて，神にすなおに従ったことが，すべてをうまく導いたのだということである。

このような意味で，神のお告げという，エネルギーの質の充実を超越的なものにゆだねるというのが，この物語の重要な要素になるといえる。次は，それによって得られた癒しを手がかりにして，この昔話から得られる「人格発達」と「癒し」のヒントを考えてみる。

[『躄長者』と「人格発達」および「癒し」]

くりかえし述べるように，このような物語に記される状態は，そのまま，現実的な事柄を重ねて理解するわけにはいかない。この物語で身体症状として記されるアンバランスは，誰かの問題ではなく，語り手や聞き手自身の，ごく普通にもっている心身のアンバランスな状態を意味している。それだからこそ，長く語り伝えられてきたのである。そのような前提で，この物語から得られる「人格発達」と「癒し」のヒントを考えてみる。

すでに明らかなように，この物語は，神の加護に対する全面的な依存という大きな特徴がある。それは，夢という退行した場面で示された。もちろん先にも述べたように，我々の日常においては，夢で示されたことそのものがそのまま実現するわけではない。この物語は，その意味で，夢の言語を翻訳して語っていると理解すればよいと思われる。

先にも述べたように，夢は，意識と無意識の全体の問題や準備状態を暗示している。従って，夢に示される事柄のよりよい解決や実現を目指せば，「人格発達」や「癒し」に至るということになる。その場合，「よりよい」方向はどのように求めればよいのであろうか。この娘が行なったことを振り返れば，彼女は祈ったのだった。「よい結婚ができますように」というのがその祈りの言葉である。その結果が神のお告げになったのである。では，祈りとはなんだろうか。

祈りの言葉とは，意識無意識の全体の方向づけを意味する。この言葉のように，それは抽象的な表現でしかない。祈りの言葉とは常に抽象的な性格を

持つものである。仮に「Xさんと結婚できますように」と，少し具体化したとしても，それがどのように叶うかについては不明である。究極まで言葉にすることはできない。しかし，言葉がある方向を指し示すことはできる。つまり，その方向に向かって，意識無意識の全体の構成を整えることはできる。退行して，全体の状態が緩和しているときこそ，そこに良い指示を与えれば，実現が近づく。この娘の場合，祈り続けて，よい方向への準備が整ったところで，眠りというエネルギーを満たす退行をし，より具体的な指示を得たと解することができる。

親鸞は，「本願を信ぜんには，他の善も要にあらず，念仏にまさるべき善なきゆへに。」（金子大栄校注『歎異抄』岩波文庫，1931/1990，41頁）と述べるように，念仏を唱えればどんな人でも浄土にいけると説いた。その念仏とは「南無阿弥陀仏」というものであった。つまり，我々を浄土へと救ってくれる阿弥陀仏の名を，「南無」と心をこめて口にすればよい。音声を発するという退行の状況で，救い主の名を呼び続ければ，その救い主が救ってくれようとしている境遇，それはまた救い主自身が居る境遇でもあるが，に到達できるというのが，親鸞の考えである。この場合，浄土に行くといっても，浄土系仏教の現世的性格を考慮すれば，死と同義ではなく，精神的な安定をこそ重視しているわけであり，この念仏による祈りと，この昔話の娘の祈りとは，構造的によく似ているといえる。

ここで，我々自身のことを振り返らなければならない。我々も祈るのである。神社仏閣をはじめとするさまざまな宗教的な場所を訪れてただ儀礼的に祈るというのではなく，本気で祈る瞬間を誰もが持ったことがあるだろう。努力した結果，最後の頼みとして祈る場合，努力も届かない遠い人の幸せを祈る場合，そのほかさまざまに場面で祈るが，多くの場合祈りは最後の手段である。それまでさまざまに試みて，なおかつ叶えられない場合に，真剣に祈る。祈る目的がなんであれ，結局は癒しを求めて祈るのである。祈るのは，意識的な努力ばかりでは最後の統合に至らないことを知っているからである。

その祈りに対して，神仏，すなわち超越的な威力が応えてくれるためには，どのようにすればよいのだろうか。この物語は，次のように教えてくれている。

まずなによりも真剣に祈ることである。問題が本当に見えるためには，意識無意識の全体を本当に整えなければならないのである。それは，意識過剰になれというわけではない。夢という退行が最後の解答を与えてくれたように，ほどよい退行を導くことができるよう，問題に焦点を合わせるつもりで祈ることである。

さらに，現われてきた問題の表面的な姿に囚われず，問題が本当に意味していることを知ろうとすることである。このときも意識過剰にならないことが必要だと思われる。意識的な解釈をし始めると，結局は自分の歪んだ内面を投影して問題の本質を見失うからである。祈って現われてきた問題なら，意識無意識の全体を象徴していることである。意識無意識の全体とは，本来，生きているものだから，問題は問題なりに，生存にとって有利な方向に転換できるはずである。それはどのようにすればよいのか，と考えることも必要である。

ここに至れば，先に『瘤取り』について考えた「自然に」ふるまうということとの共通点が指摘される。『瘤取り』の考察では，「自然に」ということを，ただ単に自分の思うままに，とか，自分にとって心地よいからなどという理解で行ってはならない，と述べた。そして，自分のわがままではなく，客観的な普遍性との合致を考えることを指摘した。

そこでも述べたが，退行しているときこそ，真の生存原理が必要である。一般に，退行している時には，何が本当に自分にとって必要なのかがわからない。健康な退行なのか，危険な退行なのか，退行している時には自分では分からない。特に危険な退行をしている時に，生存原理のことなどを指摘されると，反発し，恐怖心さえ感じる。その時こそ本当に必要なのは，真の生存原理である。つまり，その時こそ「祈り」が必要だということになる。それは，自分で自分のために祈るだけではなく，愛する人のために真剣に祈り，生存原理を伝えることが必要だと思われる。

もちろん，その問題がなんらかのハンディに結びつく場合には，先の『手斧息子』の場合と同様に，ハンディに負けないという意気込みが必要だろうし，具体的に生き抜くための工夫を繰り返さなければならないし，ハンディをこそ武器にしなければならない。それら現実的な努力があったうえで，そ

の底に，真摯な祈りを必要とするのである。

こうして，『蹇長者』は，祈りによって裏付けられた知恵を通してハンディを乗り越えて人格発達し癒される仕方を教えてくれる物語だといえる。

第六章　『田螺（たにし）息子』における「人格発達」と「癒し」

この章では，前の章に続いて，神仏，すなわち超越的なものにあやかった「人格発達」と「癒し」についての例をとりあげる。昔話は『田螺息子』である。田螺が，人間になって結婚したという話であるから，「人格発達」は察しがつくとしても，「癒し」とはいえないのではないか，ということも考えられるが，後に述べるように，息子が田螺の姿だというのは，いわば，期待外れの子どもの姿だといえる。しかし，期待しているのは親や周囲であって，彼らから見て田螺にすぎないとなれば，これは心身を病んだ子どもの姿でもある。そして，そのような子どもは子どもなりに，人格発達し，自らを癒そうとするが，それにはやはり，「退行」「再統合」とそれを遂行する「エネルギー」を考えなければならない。そして，この物語では，それらが周到に，場所に対応させられて述べられている。以上の視点から，この物語を考えてみる。

[『田螺息子』の典型]

『日本昔話大成　3』(8—24頁）において『田螺（たにし）息子』として分類されている物語は，奄美大島から東北地方まで，幅広く分布している。それだけに，内容的に異なるものもあるが，全体に共通する型，もしくは，本来完全な型だったらこのようなものではないか，という型は，意外に普遍的に伝承されているように思われる。そのひとつの代表を以下に記すが，普遍的な典型として必要なエピソードは，(1)神仏に祈って子どもを授かる。(2)田螺（蛙など）が生まれる。(3)計略を用いて娘と結婚する。(4)田螺は一度死んで，りっぱな男になって生まれかわる，などである。これらに着目しながら，具体的な物語について考える。

『田螺息子』（岩手県和賀郡）

1　子どものいない老夫婦があった。

2　水神さまにお願いして，ようやく田螺を授かった。

3　田螺はお椀に入れて神棚にあげられていたが，なかなか大きくならなかった。

4　ある祭りの日，おじいさんが町に出かけようとすると，田螺は初めて大声を出して，自分も連れて行けという。

5　おじいさんが，田螺を連れて町の長者の家に行くと，長者の一家は，神様の授かりものの田螺を大切に扱って，泊まっていくようにと勧めた。

6　田螺はおじいさんに，長者の娘を自分の嫁に貰って帰るからと，お米を小さな一袋にあずかった。

7　田螺は長者に，大切な米だからと神棚にあげてもらい，自分はゆっくり布団で休むが，夜中に神棚に上り，米をひとつかみ取り，嚙んで，眠っている娘の口許にぬりつける。

8　翌朝田螺は娘が米を盗んだと騒ぎたて，娘を嫁に貰って帰る。

9　次の祭りの日，田螺は嫁の髪に留まって宮参りに出かけるが，烏（カラス）がつついて地面に転がり落ち，姿が見えなくなってしまう。

10　悲しんでいる嫁のかたわらに，立派な若者が立っている。それはあの田螺の変身した姿であった。

11　ふたりは改めて盛大な結婚式をあげた。

[『田螺息子』の解釈]

この物語が，「癒し」をテーマにしているということについては，賛否両論があるかもしれない。たしかに，これまでの昔話のようには，明瞭な障害は無いし，癒されるという事態も無い。しかし，最後に，田螺だったものが，立派な男になったというのは，ひとつの癒しととることができる。何度も述べてきたように，昔話は，個人もしくは複数の語り手の共同主観的な象徴である。つまり，昔話の全体が一つの心理の中で展開しているといえる。となれば，当初に田螺だったというのは，語り手の内面の一要素が，人間にはなり得ない未熟な弱さを持っていることになる。それが，最後に立派な男にな

るのであるから，この弱さが克服され，発達を遂げ，心が癒されたことになる。この物語について，とりあえずこのように捉えた上で，その癒しが得られたのはなぜなのかを，「退行」「再統合」「エネルギー」などの概念を参考にしながら考えてみる。

まず，全体の見通しを立てるために最後の個所を確認すれば，そこでは「田螺の死」と「男への変身」という，「死と再生」のテーマが現われている。この「死と再生」のテーマは，昔話やメルヘン，神話などにはしばしば現われるテーマであるが，ここで，その心理学的意味を述べておく。

「死と再生」とは，いわば劇的な人格発達を意味するといえる。ひとことでいえば，何かが終ったのが死であり，新たな何かが生まれたのが再生である。絵画や夢やサンドプレイの分析では，枯れ木や骸骨や死体などは何かが終ったことの象徴だととるし，赤ん坊や木の芽などは新たななにかの象徴ととる。そして，この「死」と「再生」とは，本来セットになって連続して現われるものである。その場合，「死」の段階で、これまで述べたような，質と量との双方の意味において捉えられるエネルギーが十分に満ち足りていれば，高いレベルの「再生」が得られるし，そうでなければ，十分な再生は望めないことになる。この高いレベルの再生こそが，人格発達であり成長である。このように考えれば，この物語の田螺の死と男への変身は，まさに「死と再生」を行って，劇的に人格発達を遂げたことになる。

そして，この物語は，そのような劇的な人格発達につきもののエネルギーの獲得が，神の神秘性に支えられて，幾分荒唐無稽ながら着実に展開している。それも場所との関係を巧みに利用しながら展開していくのである。ここでの分析は，その神との関わりに着目して，ストーリーをたどってみる。

はじめに，神様に田螺を授かる。ここでまず，物理的空間とは異なるとはいえ，神の威力のもとという場所の意味のもとで物事が進展することが示される。神の力によるわけだから，エネルギーの浪費は少ないのだが，エネルギーとは本来，自分で手に入れて自分で使うというのが，昔話での原則であるから，ここでは，子どもが田螺の段階にとどまってしまうのである。

では，それはどのように人格発達し癒されたのであろうか。この物語は，前提として田螺の人格発達をモチーフにしているのだから，当初なぜ田螺だっ

たのかという問いかけは無駄だとしても，人格発達の節目節目で起こったことを再検討してみる必要はある。

はじめの節目は，誕生である。老夫婦が神に祈ったというのだから，子どもを産むにはエネルギー的に無理があることを暗示している。無理だから神に祈らなければならなかったのである。祈りに対して，神は子どもを授けてくれるが，神は絶対的な原理であるから，老夫婦のエネルギー不足に見合った子どもとして田螺を授けてくれるのである。田螺は鹿児島県大島郡の例（『日本昔話大成　3』10—11頁）や，大分県速見郡の例（『日本昔話大成　3』11頁）のように，蛙という場合もある。無意識と意識とを繋ぐ象徴という意味では，どちらでもふさわしいといえるが，田螺のような巻き貝が子宮をも象徴するとなれば，未熟な子どもが子宮で示される方がよりふさわしいといえる。

ものごとの始まり，特に子供の誕生を神に委ねるのは，ものごとのけじめすなわちロゴスつまりものごとのあり方の原理原則をわきまえていると言える。このような場合には一般に，混乱の解決は知恵や超越的な力に求めることになる。この物語は，まさにこのような展開の連続だといえる。

次の節目は，町のお祭りに連れていけとはじめて口を利くところである。これにはエネルギーの点で伏線がある。たにしはなかなか大きくならない。それは，エネルギーが不足しているからだと考えることができる。ただし，この場面では田螺を神棚に上げている。神の申し子でもあるし，神の許でいつも祈りの対象になっているのだから，潜在的には発達しているはずである。つまり，それまで神棚に祭られていたというのがエネルギーの点での伏線である。神は原理原則を意味するので，エネルギーの質的側面を意味する。もともと神からさずかった田螺が，その神のすぐそばにいることは，気持ちの上で安心できる。これは，エネルギーをじっと蓄えていることにもなる。従って，神の申し子でもある田螺が，神の許でいつも祈りの対象になっているのだから，潜在的には発達しているはずだといえるのである。

以上の点に関しては，場所の意味という視点から整理し直すことができる。上記のように，神棚が神のエネルギーが満ちた場所であることはいうまでもない。そして，お祭りとは，その期間だけ神の威力の及ぶ範囲が広がるので

ある。お祭りには，神を乗せた神輿が町中を練り歩き，町の境界にはしめ縄が張られ，その範囲は，平常と異なる特別の場所と化すのである。お祭りにつれていけ，と田螺が初めて口を利くことができるのは，この迎える場所のエネルギーがあるからにほかならない。

このように考えれば，田螺の発達が形になって現われるのは祭りの日ということになる。先に述べたように，祭りというのは，神の威力が町中に広がり，エネルギーの高まりを見せる機会である。当初田螺が口を利くのが祭りの日であるが，最後の変身による成長をみせるのも祭りの日である。このことは，まさに，祭りが場所の意味としてエネルギーの高まりを意味することと相関している。

田螺は，おじいさんに連れられて町にいくことになる。場所の意味からいえば，田舎から街へという移動は，無意識的に眠っていたものが目覚めることを意味する。従ってここでは，成長可能性の兆しやきっかけが現れた場面だということになる。多くの場合，ここでは，新たな要素が生まれるが，この物語では，「異性との出会い」という分かりやすいパターンを示すことになる。

そして，さらなる重要な節目は，この田螺がトリックを用いて，長者の娘を嫁にもらう箇所である。この箇所の狡猾さには賛否両論がある。賛成の側は，「情熱と真剣さ」を評価するのかもしれない。また，反対の側からは，トリックというずるい知恵を用いたことを批判するはずである。この反対の側の指摘があるというところが，この田螺がまだ田螺の姿から変身できないという未熟な結果になることに繋がる。ところで，このように未熟な幼さを指摘されるとしても，ともかく結婚できるのはなぜかといえば，やはり，神の加護があるからだといえよう。この田螺は，長者の家でも神棚に祭られる。場所の意味を顧みれば，神棚は，田螺にとってエネルギーが満ちる場所である。田螺は小さくて未熟なのかもしれないが，神の許で，エネルギーを得たからこそ，ともかくも，結婚という統合に至ることができたと考えられる。

しかし，その結婚はまだ未発達なものである。田螺は田螺の姿を抜け出すことができない。そこで再び祭りの日になる。最後の重要な節目は，この祭りの日に起こるのである。二人で祭りに出かけると，田螺は烏につつき落と

されてしまう。これは，象徴的な死と再生のうち，死に当たる場面である。すなわち，それまでの幼なさの死である。このようなときにはエネルギーの消耗は激しいのであるが，すでに，場所の意味としては，祭りという神の威力が満ちている場所であるから，田螺は見事に生まれ変わるのである。

田螺は立派な若者に生まれ変わり本当に結婚することになる。まさに，象徴的意味での再生であり，真の統合である。

[『田螺息子』と「人格発達」および「癒し」]

このように考えてくると，この物語には，神の威力が連続して与えられていることに気づく。それを人間の側からいえば，この物語では，我々は神の威力に頼って自分を変え，癒され，人格発達し，成長し，真の大人になったということになる。ここではこのことを，「人格発達」と「癒し」という点からもう少し深く考えてみる。

何度も確認してきたように，昔話は，個人もしくは共同主観的な意識の内部における心の動きがそのまま物語になったと考えればよい。ということであれば，生まれた子どもを田螺として表現するというのは，なにか心の中に満たされないもの，つまり癒されなければならないものがあることになる。結果的にそれが成長し，堂々たる大人に変身し，人格の完成を意味する結婚に至ったというのであるから，これは「人格発達」と「癒し」のテーマを含むといえるし，換言すれば，人格発達による癒しのテーマだといえる。

では，このような人格発達や癒しが神の威力によるというのは，どのように解すればよいのであろうか。それには，神をどのように理解するかということが鍵になる。そして，それを考えるために，田螺自身にとって神はどのように現われたのか，もしくは田螺にとって神はどのような場所として現れたのかという視点を生かしてみればよい。

始めには，田螺にとって神は産みの親である。従って，神棚にいるときには，親にはぐくまれているのと同じ意味で安らかに発達し成長する。ここでは，なんらかのエネルギーが与えられているはずである。

さらに，町に出かけることになるが，それがお祭りの日というのが重要な点である。

この日は神の威力が広がるからである。つまり田螺は引き続き神のエネルギーの許で行動することになる。

トリックを用いて嫁を得る過程でも，神棚にあげられていることが前提であるから，やはり神のエネルギーを得ているはずである。

そしていよいよ烏につつき落とされるのは，やはり祭りの日である。また，烏は，象徴的な意味において神の使いという役を果たしているともいえる。

このように，随所に神のエネルギーが関わっているといえるが，具体的に，エネルギーの量が増したという表現は無い。ということは，なんらかの質的な要因が関わっていることになるが，それはどのように理解すればよいのであろうか。

神とは絶対的なものである。従って，森羅万象のすべてであり，田螺自身も神のひとつの契機を構成しているといえる。子どもは神からの授かりものと，我々がいつも素朴に思い，この物語でもそのようにして開始されるのが，このことを意味している。

ところで，一般的には，人格発達し成長するに従って意識的な自我が目覚め，そのことで，神という全体的で絶対的な存在と自分自身との関係を忘れていく。人は自己中心的になり，大いなる全体との関係から切り離されて，自分の意識や意識的判断を過信して結局は不幸になっていく。

一九世紀のドイツの哲学者，ヘーゲルは，このような意味で「不幸な意識(das unglückliche Bewußtsein)」という概念を立てた。すなわち，意識は自分自身の内において，あたかもスケプシス主義者のように懐疑的な対立的分裂を持っている。つまりこの「二重の，単に矛盾するに過ぎない存在である意識が，不幸な意識である。」とされるのである（"G.W.F.Hegel WERKE 3 Phänomenologie des Geistes" Suhrkamp, 1970, S.163)。

しかし，彼はそのままにしておかなかったのである。彼は理性，すなわち，論理的に考え判断する能力を強く信じていたので，この不幸を理性的に乗り越えてこそ，真の学問であり，真の生き方であるとした。もちろん周知のように，ヘーゲルの場合はこの表現どおりに単なる心構えのように捉えてはならず，あくまで世界観そのものとの一体的自覚が必要である。彼の場合，理性とは，「個別的な意識が自体的には (an sich) 絶対的な存在であるという考

えを把捉して，意識が自分自身に還帰する（"G.W.F.Hegel WERKE 3" S.178)」といった事態を，すなわち，不幸な意識の段階から見れば，あたかも彼岸ででもあるかのような，対立が全て溶け込んでしまう絶対的な境位を指す。つまり，理性的に乗り越えるというのは，簡単にいえば，全体の中で個々の事柄がどのように位置づけられているのかを論理的に構成しつくすことを意味する。ヘーゲルは，学問的な理性をもってかつての宗教の持つ絶対的な威力に置き換えたと自負し，現代に続く理性主義の一端を担ったといえるが，現代から逆に神の威力などという問題を考えるとするなら，現代の論理的理性や，そこから派生した，物質によって宇宙全てが成り立っているという考え方を，神によって全てが成り立っていると置き換えて考えてみればより分かりやすくなる。

つまり，今我々が，社会や自然が網の目のように関係し合っていると思っているその仕組みの全体こそが，この物語での神に相当すると考えられる。

従って，この物語では，まずはこのような仕組みの全体に自分を委ねた場において，癒しが進行したということになる。実際に行動する時は，例えば，田螺がトリックを使って嫁を獲得するように，一見自己中心的な行動に見えることでも，神の絶対的な仕組みに自分自身を委ねているという実感で行うことが，正しい直観を与えることになるのである。田螺のこのトリックが成功するのはそのような理由によるといえる。そして最後に，烏によって最終的な成長が得られるように，絶対的なものに委ねる気持ちさえあれば，超越的な威力によって真の癒しが得られるのである。

このことを別の側面からいえば，この物語では絶対的なものに関わる際のエネルギーの用い方についても示唆されている。この物語では，田螺は本当に必要な時しか動かない。あとは，神の許でじっとしているのである。本当に必要な時とは，食事をしたりなどエネルギーを補給する時と，変化し人格発達し成長すべき時である。このことも，人格発達と癒しのための重要な手掛かりである。神の許でじっとしていることは，単にじっとしていることとは違う。先に『瘤取り』で，瘤を取ってもらうことになる爺が木のうろで無心に眠りこんだことがエネルギーの保持につながったと述べたが，それがもし，危険な場所で眠りこんでは大変である。神の許でじっとしているという

のは，それが最も安全な場所で行われたということを意味している。

本当に安全なところでじっとして，癒しのためのエネルギーを蓄えること，これは，我々の日ごろの行動においても考えるべきことである。自覚するにせよ，自覚しないにせよ，我々は，なにか癒されたいことがあればすぐに行為をおこしたがる。時として，人格発達に逆行し，ただ単に新しいものを求めてさまよって，結局は社会性を失い，生存に不利な状況に身を置きがちである。若い女性たちの中には，あいまいな理由で主婦になることを恥でもあるかのように考えている人もいる。さらに進んで，社会から飛び出して，人と違った極端な活動に身を投じることが人間として優れているのだという考え方をする人もいる。個人の生き方としては，さまざまな生き方があっても良いのであろうが，社会の全体において大多数が選び取っていく安心できる場にいて，心をゆったり保つことが恥でもあるかのような意識を持っているとしたら，生存に不利だという意味において心理的には不幸であるといえる。社会的に不利なハングリーさが大きな仕事を成し遂げると，よくいわれるが，それは本当の理由にはなっていない。社会的なハングリーさがあるにせよ，ないにせよ，社会全体の場所の構成のエネルギーを自分の生存のエネルギーにしていく能力の高いものが，大きな仕事を成し遂げるはずである。そのためには，根底的には社会全体の存在に対する絶対的な信頼感を持たなければならない。実は，社会から飛び出して人と違ったことをすることのみで自己満足を得ている人は，本当は，社会全体に対する信頼感に甘えているにすぎないのである。甘えがある以上，本来の成長エネルギーの方向性が歪められているし，結局は，成長とは反対の，非生存に向かうことになる。

このように考えれば，神という語によって象徴される絶対的な存在への信頼感は，人格発達や癒しの基礎を為す重要な要素だといえる。

第七章　物語解釈と「場所」の意味

小論は物語解釈において「場所」に着目することで，物語全体の意味獲得を効果的に行い，解釈をいっそう深める得ることを，論じてきた。紙幅の限られた小論では，特に序章で述べたように，昔話という定型化の進んだ物語

をとりあげ，また，「場所」の意味についても，特に，「意識」と「無意識」という対比的な意味構造と対応する場所構造に焦点を合わせて解釈してきた。

物語全体における「場所」の本質的意味については，特に第二章で西田幾多郎の場所論に言及して述べたが，全体としての場所と，その，特殊例としての特定の場所の双方に，普遍としての場所と，そこに存在したりそこで行動したりする個との，相関的な「場所」のダイナミズムが有効に働いてきたことはすでに述べてきた通りである。その相関的な「場所」のダイナミズムに乗って，それぞれの物語のテーマが表現されることになる。

換言すれば，これまで述べられてきた例にみられるように，いずれも，それらの相関的なダイナミズムが展開する場所の変容構造を有効に利用して，聞き手の興味を魅くというレトリックを持ち，また，それゆえに，それぞれの場所によって象徴される意味を効果的に示唆し，テーマを露わにするものであった。

小論で限定した意識—無意識構造に関していえば，意識的な場所と無意識的な場所との構造の中で，登場人物は，エネルギーの量と質とを使い分けて行動しつつ退行と再統合を行い，そのエネルギーの量と質に応じた人格発達を遂げることが明らかになった。その意味において，心理学的な目安の有効性も確認できたということになる。

そして，さらにそれぞれの物語に応じて，生きるためのヒントともいうべきより詳細な意味も示されてきた。各々のヒントの共通項を考えれば，結局のところ癒しとは人格発達を遂げることで得られるものだということである。

かくして，小論で用いてきた方法は，小論で限定した場面では有効だということが示されたが，それが，すべての物語で可能なのか，または，物語解釈を超えてすべての事柄に対して可能なのか，それらの考察をさまざまな例とともに行うのが，今後の重要な課題だということはいうまでもない。

象徴解釈で用いた参考文献

Ad de Vries “Dictionary of Symbols and Imagery” North-Holland Publishing co. 1974.
Erik H. Erikson “Identity and the Life Cycle” W.W.Norton co. 1959/1979.
ハヴロック・エリス／藤島昌平訳『夢の世界』岩波文庫，1941/1995.

C．G．ユング／林道義訳『元型論』紀伊國屋書店，1982.
M・ポングラチュ＆I・ザントナー／種村末弘他訳『夢占い事典』河出文庫，1994．他

直接引用した参考文献（初出順）

『柳田國男全集　8』ちくま文庫，1990.
関敬吾編『日本昔話大成　3』角川書店，昭和五三年.
E.Husserl “Die Idee der Phänomenologie” Martinus Nijhoff, 1973.
『西田幾多郎全集　第四巻』岩波書店，1949/1988.
井上義彦・波多江忠彦・荒木正見編『人間，何処からどこへ』ナカニシヤ出版，1998.
関敬吾編『日本昔話大成　4』角川書店，昭和五三年.
『新　日本古典文学大系　四二　宇治拾遺物語』岩波書店，1990.
太宰治『お伽草子』新潮文庫，昭和四七年.
金子大栄校注『歎異抄』岩波文庫，1931/1990.
“G.W.F.Hegel WERKE 3 Phänomenologie des Geistes” Suhrkamp,1970.